

職、任警部補となった。以後、今日に至る。

家庭は現在妻と二人暮らし。長女は嫁ぎ、長男は千葉に世帯を持って夫婦と娘二人で生活している。

(新潟県 吉田 忍)

私の青春時代記

新潟県 周 佐 吉 三

私は新潟県中蒲原郡川内村字暮坪十七番地に大正十年に生まれ、川内尋常高等小学校を卒業、その後村松町にある片倉製糸工場に入社して、以来入隊まで勤めていました。

家族は、母と兄二人、妹二人、私と、六人家族で生活をしておりましたが、兄二人は既に現役入隊を終わりに帰家しました。私は昭和十六年十二月一日に新発田の歩兵第一六連隊に集合のため仮入隊して、一週間後の十二月八日、大東亜戦争が勃発して、兵舎内は古参兵が戦場への準備のため完全武装をして営庭に集合整

列、服装点検の後、新発田駅方面へ出発したものと思っています。そのような混乱の中、私どもも同日午後三時ごろ駅へと出発いたしました。私どもの兵器は、二人で一丁の小銃と剣が支給されました。飯盒の代品として柳行李（ごうり）の小さな入れ物が全員に配給されると、今度は北支から初年兵を受領にきております下士官に引率され、新発田駅より臨時列車に乗せられ、汽車の窓は木の鏡戸を下げさせられ外を見ることができず、どこを走っているのか全然わかりませんでした。また、毎日汽車の中で下士官にいろいろと銃の取扱いを習い、また注意もされました。

着いたところは宇品港で、そこから船に乗せられました。船は漁船で魚の臭いと、また予防接種は三種混合と行先不明の緊張なども混じって船酔いがひどく、全員柱につかまって、風呂桶のような物に吐いて私はひどい目に遭いました。

いよいよ釜山港に上陸して学校のような建物で休息して、夕方、駅から満州經由で北支に入り、南口鎮というところで初年兵の教育隊に入隊。四カ月の教育を

終了して、陣第二九九六部隊第八一大隊第四中隊に配属となり、一カ月後に密雲にある大隊本部付きとなり、豊台にある兵技下士官候補隊で教育のため四カ月の教育をされ、昭和十九年春には陸軍兵技軍曹に任官いたしました。

その後、昭和二十年春、戦況により部隊は外蒙古の通遼付近の警備の任務に当たっておりましたが、ますます戦況が厳しくなってきましたので、やむを得ず本部は、八月十日ごろだと思えますが、駐屯地の通遼の本部の兵器護送のため開遼の駅まで自動車で兵器類を運び、駅のホームに並べて、さて貨物の有蓋車に積み込み作業中、何度となく上空にソ連の戦闘機が襲来と同時にサイレンが鳴り、日本の戦闘機ハヤブサも追跡するけれども、スピードが遅いので、とても追いつくどころかほとんど遅れてしまい、大人と子供の運動会のようなものでした。それを見てまことに残念でなりません。

このような状況ですからソ連の飛行機は悠々と駅の貨車を狙っていました。ソ連の飛行機は前方からまた

後方から発砲するので、各中隊の兵隊たちは隠れるところがなく、貨車の下に隠れてソ連機の去るのを待つのみでした。また、ソ連機が日本軍の飛行場を爆破するのがよく見えるのです。黒々とした爆煙が高く上るのを見て、何と説明してよいやら、ただただ残念無念の気持ちでした。一方、機関車も攻撃を受け、擬装のため蒸気を吹き上げて攻撃の中止を待っているような状態でした。

私は各中隊の使役を使って、夕方、弾薬や火薬類、兵器類、自動車のガソリン（ドラム缶）、馬具類などの積み込み作業が終わり、夜の発車を待つことになりました。夜、機関車が来て貨車と連結し動き出したので、大分走ったと思つて翌朝外を見たら、なんと同じところに貨車が止まっていましたので私はびっくりしました。その理由の情報も入りました。それは、満人の機関士が逃げ出して行つたので運転する者がいないとの話でした。それでも運よく部隊の兵士の中に機関士の経験者がおりましたので、どうやら次の駅まで走るこ

とができました。またその駅で話し合いをして、満人

の正規の機関士を見つけてようやく奉天駅に着きました。た。

ホームにいた先着の兵隊が驚いているのに不審を感じて尋ねると、ただいま詔勅放送があり、日本が戦争に負けたとのことでした。私は初めて聞きました。最初は信ずることができませんでした。私は捕虜になつたらどうなるか、生きて帰ることができないかなと思ひ、いろいろと想像していると頭の中がやるせない気持ちで混乱しそうでした。

それでも私は床屋さんへ行つてくる気持ちで駅前通りに出ると、どうも市民の動きがありません。多分暴動が始まり、その警戒のためだと思ひ、床屋へも寄らずに駅へ帰りました。私どもの大隊本部は駅近くの大きな酒造店の一部を借り設営と決まりました。その本部が連絡所となり、私は大隊長に呼ばれ、明日武装解除があるから兵器の員数と帳簿の整理照合するよう命ぜられましたので、夕食もそこそこに済ませ本部を後にして、使役の兵隊三名と早速駅の引込線にある兵器の入つた有蓋車の中で、暑いのに電灯をつけて、弾薬

の一発といえども間違ひのないように三人で現品と帳簿の照合を夜遅くまで作業を続けていました。

翌日、旅団司令部の差し出したトラックに兵器を積み込んで奉天の糧秣廠への運搬作業が続きました。トラックの使役兵の言うには、運送中満人の暴動のためトラックを止められ、積みである兵器を全部取られたとのこと。それで私も責任上、最後の荷物を積んでトラックに同乗して糧秣廠の門内に入ると、直ちにソ連兵が来て何か話すのですが、言葉がわかりませんので考えていると、今度通訳が来て言うには、外で暴動が起きているので警備不足のため、帰らないで兵器を持つて糧秣廠の警備に当たつてくれるように頼まれましたので、ただ断るのも恐ひ気持ちでした。

大隊本部も最初の酒造店におらず、連絡も取れず毎日交替で赤い布切れを腕章にして市内を探して歩きましたが、見つけることができませんでした。一週間後くらいだと思ひますが、ようやくソ連兵から帰つてもよいと命令が出ましたので、軍隊で使用の輜重車に二十キロ入りの米カマス三俵と調味料など若干積み込ん

で、私も四人で糧秣廠を出発いたしました。

毎日当てもなく大隊本部を捜し歩きました。市街地の所々に暴動のためか満人の死体がごろごろしていました。目と鼻と口と耳には大きなハエが真っ黒にたかっているのを見て、人間も犬死にするとこのようになってしまうのだと思い、何となく気の毒な気持ちになりました。

また、私もは市内地へ行くと、ソ連兵に市外地へ行くように指示され、毎日のように市内地と市外地を行ったり来たりしているうちに、運よく四、五日くらい過ぎたころ、市外地で大隊本部に出会いました。そのころ、本部ではすでに食糧もほとんどなくなつて困っていたところへ、私もが運んできた食糧を見てみんな喜んでくれました。その後大隊本部と行動を共にしました。

市内と市外地の往復をしているうちに大きな広場に集合させられ、乞食同然の姿で約五、六百人くらいが四列縦隊で行進をさせられ、また両側にはソ連兵がマンドリンのような機関銃を持って警備のためについて

きました。私の武裝解除の姿を見て、満人たちは手のひらを返したように私も日本兵に対して罵倒しているが、私もは何一つできず悔しい思いをしました。今でも當時を思い出すので忘れることができません。

私の部隊は大分歩きました。何駅かわかりませんが、臨時列車に乗せられました。また駅の付近や鉄道沿線には多数の腐乱死体が散乱していました。そのような光景を後にして北へ北へと列車が走ります。私の部隊は数日後満州の黒河の川原に集合、そこで天幕を張り野営をして三、四日くらいおりました。ソ連兵の言うには、ヤポンスキーはナホトカからダメイするので一週間くらいの食糧を持って行くようにと何度となく指示がありましたので、本当に今度は日本に帰れると思います、そこで満州の紙幣は不要と思つて全部タバコやパン類などと交換をしました。九月末日ころだと思いますが黒龍江を渡り、ナホトカ港へ帰るものと思つていました。ところが、対岸のソ連領のクイブシエフカで持参の食糧を一カ所に集積させられ、私

どもはそこから貨物車の有蓋車で、中は二段仕立てのただの板場に四十人くらいずつ分乗して、一路ナホトカ港へ向かって南へ南へと走っているものと思っていました。夜になって貨車の扉から星空を見ると、なんと北へ走っている感じでした。

「オーイみんな、北斗七星がだんだん近づいてくるぞ」「これはモスクワに連れて行かれるのだ」「あつ、騙されたぞ」「我々はやはり捕虜になったんだ」、どこへ連れて行かれるのか、また何をされるか、帰る事ができないのかなどなど、みんな寝ることを忘れて話し合つては、騙された悔しさと、また行く先に何が待っているかを考えると不安が募るばかりでした。何しろ他国ソ連領です、逃げることはできません。また輸送中我々の食糧は、日本のお米はなく馬の食べるコーリヤンを受領し、それを引込線で薪を捜し集めて飯盒炊飯をして、車内に持ち込んで缶詰の配給で食べました。私どもは今までコーリヤンの皮の付いているものを生まれて初めて食べました。

このコーリヤンが今度は私どもの主食となり、捕虜

の悲しい生活が始まりました。このコーリヤンは時には無配給のときもありました。そのようなときは、少し残しておいて、水を少し入れて炊飯するとまた飯盒に山盛りになるので、時には三回くらい水を入れて炊きました。

そのような列車生活も終わり、十月八日ころと思いますが、午前十時ころイルクーツク州のチェレンホーボ駅から行進して、有刺鉄線の囲いのあるチェレンホーボ捕虜収容所の門の前で私物などが検査され、そこで印かん、預金通帳、大事な手帳など一切の私物を没収されました。捕虜収容所では全員に一連番号が付けられました。私は一五七八号と呼ばれました。また有刺鉄線の囲いの中は、見るからに自由もなく恐ろしいような感じでした。収容所の四隅の上には機関銃を持った兵隊が二十四時間警備のため見張っております。私どもより先着の部隊兵もいましたが、私どもの後からも続々入所して、その冬最後には四千人くらいになったと聞きました。

収容所内の各棟は床板張りの倉庫のような大きな建

物で、両側には二段造りの上下四人用の寝台があり、一棟に約二百人くらい収容されました。全部で二十五、六棟あり、そのうち炊事場、病棟、浴室と床屋は同じ建物で、その他に将校専用宿舎などがありました。便所は、私どもが新しく、長さ二十メートルくらい、幅は五メートル、深さ四メートルくらい、その上に丸太の横木を渡して中仕切りをして建造したものです。また両方の囲いの外には板をV形にして小便専用に使ったものです。

また、入所後は被服の受領や部屋割り、身体検査などがあり、ソ連の女医さんが聴診器を当てて一通りの検査を終え、体重や目の検査、それからお尻の皮のタルミ具合で一級から四級まで決められるのです。一級の人は作業ノルマ百分が基準となります。また二級の人は作業ノルマ八〇%で換算して百分と見ます。一、二級の人は収容所外の重労働です。三級の人はノルマ五〇%だそうです。収容所内の軽作業で、例えば炊事場、浴室や病室の掃除、又は収容所内の諸々の仕事に従事します。四級の人は病人らに区別されました。

この収容所は水道も入っておりませんので、翌日から早速炊事場で使う水運びの使役が割り当てられ、荷車の上にビヤ樽の大きな物を乗せて固定をし、二キロメートルくらいのところ給水の設備がありそこから何往復となく運びますので、こぼれた水が凍結して道路がキラキラ光り歩くのも危険な状態ですが、炊事場に満杯になるまでで、満杯になると休息があり、そのときは少々ではあるが主食にしている燕麦の焦げ付きを貰えるので、ちようど空腹を満たすのであります。

また、私どもの食糧となるキャベツの運搬作業がありました。そのときは各人は軍隊の天幕を風呂敷代わりに持って集合、キャベツ倉庫まで二キロメートルくらいの道中でも銃剣を持ったソ連兵が一人最後尾についてきました。倉庫から各人四、五箇くらいずつ運搬する道中、ソ連兵に見られないように天幕の端から一個取り出して生キャベツを歩きながら食べましたが、青臭いやら甘辛いので、食べ残りを捨てるにもソ連兵がいるので無理して食べました。やはり生きて日本に帰るには背に腹は替えられぬという気持ちになりました。

た。

収容所内へ水道を引くため、炊事場から二キロメートルくらいのところは水道の給水設備があるので、そこまで土掘り作業のため、私どもは道路を深さ三メートルくらいまで、それも幅が狭いので、掘る人と上とで二人して二段ばね作業になります。三メートル掘ると、一番下に木挽糠を敷きその上に鉄の管を設置して、また木挽糠を被せてから土を入れて終わりとなり、この作業が二カ月くらいで竣工しました。それで蒸し風呂もできるようになりましたが、すでに全員にシラミが蔓延して、私どもの下着の縫目にはシラミの卵がいつばい張り付いており、体じゅうがシラミで痒くて、全員暇さえあればシラミ取りです。それで蒸し風呂に入るとき、下着の消毒をしてくれるのです。春ごろようやくシラミも全滅しましたが、部室の窓の付近には南京虫が多くて、これにもやられて、痒くて本当に困りました。南京虫の場合は刺し口が二箇所あるのでよくわかりました。

私は炭坑の作業班に編成され、部室も全部炭坑の作

業をする人たちと一緒に住むようになりましたが、炭坑の作業時間は八時間労働の三交代制で、非番の各作業班ごとに、部室の両方の出入口に一人ずつ泥棒除けの不寝番が一時間交替で勤務しました。私どもの収容所から作業現場までは約二キロメートルくらいところで、大きな露天掘りの炭坑がありました。その炭坑は、白樺林の地下五メートルくらいの厚さの土砂を、電気の大形のハツパを掛け、電気で動く特大型のシヨベルカーで土専用の貨車に積み込んで捨てて来る。土を取り除いた後は黒光りのする石炭の層があり、その厚さが何と三十メートルくらいあります。その最下位のところに石炭を選別所へ運ぶベルトコンベヤーが据えつけられてあります。また、炭坑内は広大で石炭運搬用の貨車の引込線が何本もあり、各選別所には二十トンの無蓋車が配車され、満車になるとまた代わりの貨車が配車されます。

各作業班員は三十名で、八時間のノルマはたしか二十トン貨車満車で百%です。各班の採掘場は、横の長さが五十メートルくらい、奥行四メートルくらいあり

ました。石炭が四十センチメートルくらいの下に、パ
ロードといって泥炭の層が五センチメートルくらいあ
り、また石炭の層になっています。このパロードとい
う泥炭の層は堅くて粘土を圧したような物です。それ
をツルハシと石炭専用の大きなスコップで取り除くと、
ソ連人のハッパ専門係の人が来て、長さ一メートルく
らいの電気ドリルで一メートル間隔くらいで穴をあけ
て、穴にダイナマイトを差し込んで、最後に長い導火
線にタバコの火で次々に点火、全員安全なところで待
機する。そこで大切なことはダイナマイトが何本爆発
したかを数えることです。

爆発が全部終わるとハッパ係の合図で仕事に取り掛
かるのですが、そのときは、コンベヤーに石炭が山盛
りに乗っていますが泥炭も少々混じっていますから、
それを急いで取り除く作業が先で、その後は大きな石
炭用のスコップで下のベルトコンベヤーに石炭を投下
する作業になります。下から吹き上げる石炭の粉で顔
や鼻の穴や手などは真っ黒になりますが、坑内には
所々に地下水みら溜まり水もありますが水質はよくあ

りませんので、顔と手などを洗って次の作業班に申し
送るのです。炭坑作業の交代は朝八時と午後四時、そ
れから午前零時の三交代制で、これが一週間交替で繰
り返されます。

また、シベリアの気候は、五月ごろようやく三十セ
ンチメートルくらいまで土の中の水が溶けてタンポポ
の花が咲き始めます。六月ごろになるとコルホーズか
ら馬鈴薯の種薯植えの使役作業があります。七月に入
ると短期間ですが夏の気候となり、朝三時ごろになる
と明るくなって、夜は十一時半ごろ炭坑の作業班が歩
哨舎前に整列しますが、外で新聞も読める明るさで、
本当に暗い時間は夜十二時から朝三時くらいまで約三
時間くらいです。また、八月も中旬を過ぎると、雨の
日などは手が冷たく感ずる気候となります。九月に入
るとコルホーズから馬鈴薯の収穫作業の使役が炭坑の
休みの班に割り当てられ、使役に行くとき薯は食べ放題
ですが収容所に持ち帰ることはできません。

コルホーズへは炭坑の中の道を通りますので、重い
けれどもなるべく大きな石炭の塊を持ってコルホーズ

の現場へ。現場では早くも監督が馬に乗って、大きな三角定規のようなもので一日のノルマを測定していました。また、馬車にビヤ樽の大きなもので水を運んであるので、その水を飯盒や水筒に入れ、その日の当番が早速持って来た石炭に火をつけて、私どもは手もと近くの馬鈴薯を掘り起こして、水の節約のために付近の草で薯を拭いて飯盒の中へ。石炭の火力が強いので、すぐに薯がゆで上がったのを草の上に取り出して、みんなで食べます。その間にまた薯をゆで始めます。これを繰り返しているうちに、午後になると薯で腹が満腹となり、仕事も手につかずノルマを達成していないので、所々掘ったりまた薯の茎をすばすばと抜き取ってごまかしておく、監督は帰る時間ごろに来て怒りますが、警備兵は時間が来るとさっさと帰るように私どもに準備させ、警備兵と監督が話をしている間に私どもは整理して警備兵の来るのを待っていると、監督と話をして解決するようです。それで時間までに収容所に着きました。

また、三キロメートルくらい離れたところに別の捕

虜収容所があり、その作業隊が日本に帰るので手不足となり、急に今度は坑内掘りの応援で私どもはその炭坑で約半年くらい作業をしました。中に入ると四方八方といつてよいくらい坑道がありました。中は暖かくて空気は悪く、湿度が多く、両側には坑木が並んで立っていますので何か不気味な感じ。坑内掘りはメートルくらい先に行くと坑木組みをしなければなりませんので、入るとき、トロッコに坑木を積んで入り、石炭を運び出して帰るときまた坑木を積んで入るので。それを鋸とナタで切り込みをつくり、組み合わせて横と天井に落盤しないように組み立てることで。それができないと坑内掘りはだめです。また時間も短く感じました。

冬は朝十時ごろようやく相手の顔がわかる程度です。雪質は粉雪で、量は二、三センチメートルくらいしか降りませんが、風が強く、吹き溜まり以外は雪はありません。また、寒さも厳しい中、私どもの作業は零下三〇度までと決まっております。炭坑はスリパチのようになつておりますから風も当たりませんが、それ以

外の作業場、例えば木工場、鉄工場や鉄道線路の敷設作業などでは、風速一メートル当たり一度下がるので、私どもは鉄道線路の敷設作業中に体感温度が六〇度くらいになることが度々ありました。その都度、作業は中止命令が出ました。そのくらいの温度になると、顔全体、特に鼻や耳たぶ、指先が白く凍傷になるので、お互いに相手の鼻や耳たぶを見せ合いて確かめて帰るのです。これは歩きながら実行するのであります。

そのような寒さの中の生活ですから、ある程度馴れてきて三〇度くらいだと暖かく感じるので。雀は毛並みが一回り大きくなり、寒いのでペーチカの煙突の中で暖をとって真っ黒になっています。有刺鉄線は霜のため太くなってワイヤロープのようになって見えません。私どもの服装は、綿の入ったロシアの作業服に軍隊の下着と軍服、防寒帽と防寒手袋、それと靴下代わりにネルの三角布で足を包み、厚いフェルトの布を圧縮した靴を履いて、外套は羊の皮でつくったもの、ロシア語でシューバといって寒風も防ぎ、なかなか暖かい外套です。冬はこのような服装で毎日、日曜日もな

く作業場へ行きます。零下二〇度くらいのときは作業服も脱いでやります。私どもは、ノルマ百%達成の時は燕麦の精白したものでお粥より少し固めにつくったものを少々と、黒パン七百五十グラム、肉少々とバター、キャベツ、馬鈴薯の入ったスープを飯盒に半分くらい支給されますが、ノルマ未達成のときは減量となり、黒パン六百五十グラムになります。

また、一週間に一度ずつ糧秣を受領しますが、倉庫に燕麦がないときはある物を、例えば塩マス、グリーンピース、キャベツなど、そこにある物を受領します。で、一週間そればかり主食となります。塩マスなどは四分の一くらいが一人前ですが、塩分が多くてのどがかわいて困ります。またグリーンピースは量が少ないので毎日空腹を感じます。何ぶんにも飯盒の中蓋に半分くらいしかありません。キャベツは半分に切って塩湯でゆでたものを飯盒に入れるといっぱいになります。これもキャベツのみになると全くいやになります、これを食べないと生きて帰ることができないと思つて、腹一杯になるように何でも食べました。

タンポポや馬鈴薯の葉などもゆでて食べましたが、馬鈴薯の葉の裏側のざらざらがのどに引つ掛かり、なかなかのどを通りません。それでも私どもには大切な野菜でした。今考えると、よく食べたものだ。これらは昔は馬や家畜の食糧と考えてきましたが、収容所に入所以来満四年間、これを繰り返して生活をしてきました。また、私どもはそれでも現役入隊した者ですから若さと体力がありました。召集兵で入った兵隊たちは飢えに我慢ができなくて、夜、炊事場の横に腐った野菜屑の捨て場があるので、その中から凍った馬鈴薯や燕麦の焦げついて捨てたものを拾ってきて、飯盒の中へ入れて部屋のパーチカの上に飯盒を乗せてゆでて食べたりした人たちが多く、下痢を起こして栄養失調で死んでいきました。

最初のころは燕麦の焦げも炊事場の水汲み作業の小夜食としてもらって食べましたが、ロシアの軍医さんの言うには、焦げつきは釜の底の小砂があるので捕虜には食べさせるなという指示により、それからは炊事場の横に捨てておりました。私は常にどんなに苛酷な

生活でもこの土地の肥料になっておれぬと心に決めて、四年間頑張りました。精神的に弱い人たちが死んだと思えます。

この収容所も二年くらいからダモイの話が出ました。最初は病人の人たちがダモイすることになりました。また、鉄道線路敷作業班の人たちは、昨日も今日もダモイ列車が行ったという話が入るたびに、本当に身体の弱い人たちが羨ましく思ったことがあります。私どもの収容所に一年に一回ダモイがあります。

ダモイのあるときは、全員広場に集合するとロシアの将校が来てダモイの該当者の番号を読み上げるのです。残念ながら残りの人たちはまた一年間ここで生活をしなければならぬと思ひ、冬の零下六〇度の寒さを出して心寂しくなりますが、何としても元気で祖国に帰るといふ気持ちになり、来年は必ず帰れるだろうと心に決め、とうとう四年目の七月ごろと思ひますが、ダモイの集合がありました。

そのときは既に収容所内の人数も大分少なく、五、六百人くらいだと思いますが、ダモイの番号は少ない

方から読み上げられ、私の一五七八番が呼ばれたときは本当に嬉しくて、いろいろと考えると頭の中が混乱しそうでした。それから数日間、ダモイ列車の配車のあるまで炭坑の作業をしておりました。いよいよ列車の配車が決まり、私物の整理をし、少ない衣類を携帯して広場に集合、私物の検査があり、その後番号順に整列して門を出ると、後も振り向かず一路チェレンホーボ駅へと行進。駅の引込線から臨時列車に乗せられてもまだ信用する気にもなれず、別の収容所へ行くのかと思いましたが、列車が発車して、バイカル湖を見てようやく信用しました。

数日後、バイカル湖を経て最終駅ナホトカへ着きました。そこは砂地で遠浅の宏大な海岸のある浜辺に天幕が数多く張られてありました。また、先着の人たちも大勢いました。また驚いたことに、便所は遠浅の海に二十メートルくらいの桟橋を掛け、中を仕切つてあるだけの便所でした。下には海水があり、みんな波が運んで行くのです。

作業は、市内の小高い丘に民家が多く建っていました

た。私どもは引揚船の来るまで毎日、建築作業の使役に一週間以上手伝いました。待ちに待った帰還船が入港したので、今度は本当に帰るために私どもは消毒のため入浴することになり、脱衣所から浴場へ入ると、一方通行になって別の出口があり、そこには自分の私物も着衣もなく、別に準備された衣類がありました。それで私物はまた没収ということになりました。それで着のみ着たままの姿で船に乗り込んだのです。私は船が出帆するまでいつ名前を呼び戻されるかと思いい当に心配で、早く船が出ればよいと考え船の出るまで気持ち落ち着かず、あの気持ちは今でも忘れることができません。

いよいよ出帆の汽笛が鳴ると、やれやれもう大丈夫と安心いたしました。それはソ連人が乗つてこないからです。船内は平穏で、度々甲板に出て日本海を眺めて早く舞鶴港に上陸したい気持ちと、敗戦の日本を考えると喜んでばかりはいられない複雑な気持ちでした。いよいよ舞鶴港が近くなると、海中はクラゲがいっぱいびっくりしました。舞鶴へ上陸したら名簿と照合、

また入浴と消毒をして旧軍隊の服が全員に支給され、着替えを終えて一泊、夜は大歓迎されました。翌日、実家の最寄りの駅までの切符をもらって仲間と一緒に途中の駅まで来て、手を振り元気で暮らそうとお別れをしました。そして私は一人村松駅に着きましたら、村役場の兵事係の方と部落の方々も出迎えてくれましたので嬉しかったです。

軍隊生活四年、ソ連に四年、計八年間の社会の空白が続きました。私は昭和二十四年九月一日帰宅いたしました。戦後四年を経て社会も落ち着いて、各職場には募集ありませんでした。それでも部落の人から農協の自動車の助手兼人夫に来てくれるように言われて、私も遊んでいることもできず、喜んでお願いして雇われ、頑張りました。

二年後には自動車の免許証も手にしてやっていると、農協の事業がうまくいかず解散しました。それで今度は建設会社に入社、トラックの運転手をしておりましたが、またその会社も倒産となり、隣の町の役場の建設課に入りました。そのころ、同年輩の人たちは既に

要職についており、給金も大きく差がついておりました。それでも私は、幸いに体も健康で、数年前に退職して現在は年金生活ですが、孫三人と計七人で暮らしております。

五十年回顧

石川県 中田 清康

軍隊

さて、私は昭和十六年三月、工業学校機械科を卒業し、関東防衛軍野戦建築隊（六九三部隊）軍属などを経て、敗戦の色濃きころ、在満召集により東満国境東寧付近大肚子川に駐屯する満州第七六三部隊（第十二師団輜重隊）へ昭和十九年六月十五日夜遅く入隊した。その晩は休むまで班長も助教も助手も親切でやさしかった。米田伍長殿、野口兵長殿、金子上等兵殿、その後五十星霜、今いずこに——ご健在であろうか。

その夜寝台に入り、しばらくして首筋がモゾモゾす